



第192号

発行所 上高井教育会
発行人 上高井教育会長
市川武彦
編集人 会報編集委員
斎藤章子
印刷所 須坂新聞社

谷川先生をお招きして

池上 篤

私は今年度、谷川先生より二度ご指導を受ける機会に恵まれました。先生が上高井の中心講師をなさるのは今年度が最後ということ、大変貴重な経験をさせていただきま

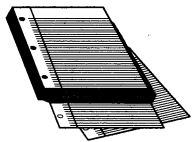
した。今回、紙面をお借りしまして、谷川先生よりいただいた貴重なご助言について報告させていただきます。今回ご指導いただいたのは、指導案のあり方、生徒のインカレッジ、明るい展望の社会学習の三点でした。

まず、一点目については、情報公開の流れにある現代社会において、教師だけでなく生徒側からも学習を組み立てていく必要があるのではないかと、二十世紀型の指導案から、情報を生徒にも公開したチャレンジメニューに変えていく必要があるのではないかと、うす唆を受けました。続いて、二点目は、生徒を

どうインカレッジしていくかという問題についてでした。インカレッジという言葉については、まだ適切な訳語はないようですが、刺激・鼓舞・やる気を出させるというような意味だそうですね。発表を取り入れた学習の流れにおいては、発表前にグループでの討議を入れることが有効であることを教えていただきました。三点目は、歴史学習では対象を正と負の両面からとらえて、生徒の夢と希望を育てていってほしいということでした。たとえば、今回の製糸業の授業であれば、労働は苦しいという面はあるが、反対に年に一回の楽しみとして運動会があるという面もある。一は十に転換していくのだというのを、これからは生徒に考えさせていってほしいという、大切な視点を示していただきました。

谷川先生からは、様々なこ

とを教えていただきましたが、研究の方向性についてはよいこと。授業の流れがよく考えられたものであったこと。今回の授業のような郷土史の学習を指向していってほしいこと。などの評価もいただくことができました。何よりも、「久しぶりに面白い中学校の授業を見た。」と言っていたことは、自分にとって何よりの励みとなりました。最後にになりましたが、懇切丁寧なご指導をしてくださった谷川先生には改めて感謝させていただきます。今後の教育活動に励んでいきたいと思っております。(墨坂中)



本校の中核活動

紫米に思いを寄せて

日野小学校

黄金色に輝く一面の稲穂。手ぬぐいを首にかけ、稲刈り鎌を片手に汗をふきふき黙々と稲刈りに励む子どもたち。毎年、五年生が取り組んでいるお米作りの収穫の様子です。しかし、今年は少し様子が

違いました。水田の一角が妙に黒ずんでいます。病気？いえそうではありません。今年の五年生は紫米の栽培に取り組んだのです。

四月、社会科の学習で世界の主食調べをしました。その中で「ベトナムには黒いお米がある。」と話題になりました。調べるうちに日本にも紫色のお米があることを知り、「見てみたい。」「食べてみたい。」と紫米への気持ちがどんどん高まっていったのです。近くに農事試験場があり、協力していただけて何とか苗を手に入ることができました。

いよいよ田植え。不安な空模様。最初は小雨だったのが大粒になり、土砂降り。しかしひるみません。裸足で土の感触を味わい、紫米の苗が黒ずんでいることに驚き、六アールの水田すべてを植え終わったときには、とても満足そうな表情を浮かべ、泥だら



けの顔に真っ白な歯が輝いていました。

その後、順調に育つ稲を見ながら様々な発見がありました。「紫米の花は何色なんだろう。」「やっぱり紫色だよ。」「いえいえ真っ白なふつうのお米と同じ花でした。」「本当に紫米なの。」「心配になって穂から一粒取ってみると、現われたのは黒光りする紫色のお米。」「わあ、本当に紫なんだ。」「思わず感嘆の声が上がりました。そして冒頭に戻ります。大きく育ったお米の収穫を体全体で味わった子どもたち。今、そのお米をどう味わうか話し合っているところです。協力していただいた方たちへの感謝の気持ち、収穫の喜びを噛みしめながら一粒一粒を大切に味わってほしいと思います。(大工原雅将)

教育会だより

- 10・25 第4回研究小委員会
- 10・25 日連教徳島大会 本会から三名参加
- 11・13 第6回同好会
- 11・16 研究日 谷川彰英先生
- 11・16 社会科研究委員会ご指導(於 墨坂中学校)
- 11・16 谷川先生感謝の会(於 迎賓会)
- 11・16 県美術教育研究会上高井大会(於 高山小学校・墨坂中学校)
- 11・21 教育会中間会計監査会(於 高山小学校)
- 11・28 第6回常任委員会
- 11・30 北信図書館大会上高井大会(於 小山小学校・墨坂中学校)
- 12・1 第23回教育会研究発表会(於 教育会館)
- 12・4 第6回代議員会
- 12・6 第5回研究小委員会
- 12・11 教育研究会三団体代表者会
- 12・15 上高井教育会報192号発行
- 12・18 第7回同好会

算数

「子どもの学び、教師の学び」

高甫小学校

高甫小学校では「子どもたちが、自ら課題をつかみ、主体的に学習していくための支援のあり方はどうあったらよいか」を全校研究テーマにすえ、算数科は二年続きの研究に取り組んできた。昨年度は課題把握の大切さと奥深さを学び、その上で今年度は、子どもたちの実態や指導の反省から算数科として育てたい力を「筋道を立てて考える力」と決めた。この力を育てる授業構想では、課題把握と解決の見通しを持たせる指導・支援のあり方が重要であると考えた。「子どもたちが一番輝いたときはどういうときか」と全校職員で日頃の実践を見返し、事例を出し合う中で指導・支援の手がかりを見つけた。ごく日常的な「教師の出」の中に大切な手だてがあることを子どもの姿を通して再確認した。

当日は四年生「面積」1字型の複合図形の求積の学習を公開し、研究協議していただいた。自分の考えを進んで表現することがなかなかできず友だちの考えに同調しがちなTさんは、前々時に学習した1皿に区切って考える仕方ではじめた。一方、隣の子は複合図形に補助線を入れ分割して求積している。隣の子と違う自分のやり方に不安な表情を浮かべていたが、自分の見通しに沿って進み長方形に分ければ立式して求積できることに気づくことができた。

困難を感じると立ち止りがちなKさんは、複合図形に二通りの補助線を入れそれぞれ求積したが、答えが食い違ってしまった。マスシートで面積を数えて確認してから何度も自分の思考過程をふり返り、やがて面積と長さとの混同に気付いて自己修正していくことができた。

研究会の中で、①図形をどんなイメージでとらえるのか感覚を磨くこと②教師の支援を少しずつ減らし、最終的には既習の力やもてる情報を生かして児童が把握できるようにしていくこと③個人追究の結果を全体で討論できるように育てていくこと④ゴールイメージを具体的な児童の姿で持ち一時間の授業をデザインすること

「教育課程研究

などのご指導をいただきました。たくさん学びをありがとうございました。

生活科

はなれ山チャレンジ大ぼうけん

豊丘小学校

「あつカモシカだつ」というH君の声に、子ども達が集まってきました。指をさした方を見ると、一頭のカモシカがこちらをジッと見えています。「カモシカも遊びに来たんじゃないのかなあ。」とNさんが言いました。

学校の裏にある離山を山主さんにお借りして、生活科で二年生の遊び場を作ってきました。題して「はなれ山チャレンジ大ぼうけん」。カモシカに出会ったのは、その遊び場に一年生を招待した日のことでした。

豊丘はその名前の通り、自然の豊かな地域です。ちょっと山に入れば、こんなふうにかモシカにも出会えてしまうのです。今年の二年生の生活科では、そんな豊丘の地域の良さに目を向けて、探検や遊びを通して、子ども達が地域や物、人といっくりに関わる経験をするを一つの柱として活動を進めてきました。「はなれ山チャレンジ大ぼうけん」は、そんな中から生まれてきた活動の一つです。

離山に登り、子ども達は場所の特徴や周りにある自然を生かしながら、いろんな遊びのコーナーを作りました。松

ざいました。(宮坂ゆかり)

ぼっくりの玉入れや的あて、どろりりのパチンコや宝探し、忍者の修業コーナーややぶを切り開いて作ったけもの道などです。忍者の修業コーナーでは、木登りの上手なY君が、誰も登れなかった木にするすつと登り、ターザンロープを掛けてきました。けもの道のコーナーでは、K君がやぶを切り開こうと太い木と向き合っていました。

昨年は服や手が汚れるのが嫌だったMさんも、お尻や膝に土を着けながら遊んでいました。離山では、こんな豊丘の子どものらしい輝く顔がたくさん見られました。

離山を借していただいた山主さんと手紙で交流をする中で、山主さんがリース作りの名人だという事、離山にはきつねやたぬきの穴もあるという事が分かってきました。先日は山主さんのお家へリース作りを教えていただきに行き、「今度は、離山のきつねとたぬきの穴に案内してもらおうんだ。」と子ども達は楽しみにしています。そして「雪が降ったら離山でそりだね。」と次々と夢をふくらませています。離山での活動は、まだまだ続きそうです。

(桜井直子)

「女性青年教師大会報告」

私が得たもの

岡島美由紀

今年度女性教師委員長として、女性・青年教師大会を運営させていただきました。突然な大役を仰せ付けられ、戸惑い、不安をかかえての一年間でありました。しかし今は無事に研究大会を終え、ホッとすると同時に、この大会の運営に当たり、多くのことを学ばせてもらったのだなあと実感しています。

まず初めに講師の先生をどなたにするかということ、大きな問題でした。多くの先生方の希望にかなった講師を呼びたい。そんな思いからアンケートを実施したところ、教育界の方ではなく他の分野で活躍している方、総合学習を行う上で学べる方、という二つの課題をいただきました。講師の選定、交渉、依頼と、講師が決まるまでは、委員長として最も気を遣い、また貴重な体験であったと思います。

さて、この研究会を進行にあたり私が一番得をしたこと、それは講師の広沢里枝子さんとの出会いでしょう。一度、打ち合わせのたれにご自宅を伺ったことがありまして、今までの私の人生の中で、障害のある方のお付き合いは、全くないというほどありませんでした。どうやって接した

(森上小)

協議会を終えて

図工・美術

「子どもがつくる課程」をめざして

高山小学校

私たちは、図画工作の教育過程の研究において、子どもたちが造形活動を思いのままに進め、心と体が一体的に働き、つぎつぎに新たな発想をしながら、自らつくりだすことを楽しんで活動場面を考察することを通して、そのような姿が、どのようなことによって発揮されるのかを明らかにしようとしてきました。

そのため、できるかぎり、「つくる」ことの過程」を子どもたちの行為に委ね、そこで発揮される子どもたちのよさや可能性を共感的に受け止めることに心がけました。

そのような中で展開する子どもたちの学びの行為の分析によって、明らかになってきたことは、次のようなことでした。それは、子どもたちは、材料と関わり合いながら、自分と材料との関係をつくり、つくりかえ、そのことによって変化する材料や場所の状況・状態を楽しむ、そのように更新し続けることで思いをふくらませながら、自分の行為の可能性を広げていくということです。その際、友だちの行為やその意味にも働きかけ、働きを受けるという相互的な関わり合

いを通して、材料やつくりつつある「こと」や「もの」を共有していくという総合的な働きを発揮しているともいえると考えています。

そこで、子どもたちは、自分の感じ方・考え方・行為の仕方の総合的な働きを生かして自分のよさや可能性を発揮していく存在であるという子ども観に立ち、そのような活動場面が子どもと共につくりだしていけるように授業を構想してきました。その中で、つくることを楽しむことができるようにする教師の支援の在り方を探りつつ、その際に見られる子どもの姿を具体的に、どのようなように評価したらよいかということについても研究してきました。

研究の過程においては、指導仮説の甘さが、つねに指摘され、自分たちが求めている「子どもがつくる過程」という教師の願いそのものの在りようを見失いそうになりましたが、目の前で現実につくりかえて生きている子どもたちの姿に励まされ、研究を続けることができました。これからも、「全人的な力である『生きる力』の育成を最重要課題として受け止め、子どもがつくりだす過

程に寄り添った教育の実現を目指していきたいと思えます。

理科

生徒の具体的な姿から学んで

高山中学校

本年度の教育課程研究協議会は、新学習指導要領の完全実施を翌年に控えているということもあり、重責を感じつつ研究をスタートしました。

どのような研究内容・授業にしたら、参加校の教育課程編成に向けて役立つ資料を提示し、参加される先生方の授業改善につながる提案をすることができているのか、悩み考える日々が続きました。

しかし、その答えは意外と単純なところになりました。

今、目の前の子どもたちを離れては、研究も授業実践も成り立たないということです。何も特別なことを提案する必要はない。『日常の理科学習の実践における生徒の実態から、研究課題を明確にして実践すればよい』。そのように考えることで、それまでの心の内の暗雲が一気に晴れ、研究が推進していきました。

従前の研究では、生徒の実態について、「できない」「不足している」「姿を」「このようにな生徒」として列挙したうえで、目指す姿として「このようになるだろう」とする場合が多いことに気づきます。そこで、今回、その発想を変えてみることにしました。すなわち、生徒の研究の姿の中に目指す姿を見出し、そのような学習を

(北澤 晃)

本校の宝 ③⑥

「校歌」のもとに

相森中学校

「四阿山おろし吹き来たたり、西アルプスをこゆるとき…」。

新任職員を迎え、先生方の歌ってくれた校歌は、男性パートの重厚な響きに支えられ、女性パートが伸びやかに輝いていた。本校に赴任できた喜びと、本校が培ってきた歌声や実践の奥深さを思い身を引き締めた。

創立以来五十有余年、校舎は三代目となり形を残している物はほとんどない。しかし、先輩から後輩へと脈々と受け継いできたものがある。その一つが校歌である。

四月以来、様々な場面で校歌が歌われている。新入生を迎える入学式、夕暮れ迫る延暦寺の講堂や奈良公園、立山の山小屋で。色づき始めた中庭では、アメリカの教育使節団を迎えた。タンザニア大使も迎えた。何と言ってもメッセナホールでの大合唱。

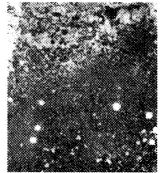
創立のその年、昭和二十三年に校歌は誕生した。「あの一握の黒土も創業の日を語らずや」とあるように、まさに、校舎や校庭は保護者や地域の人々、生徒の手で整えられたという。今でも東から西の試験場の方向に雨水が流れるグラウンドは、東側の土を切り崩して、西側にその土を盛るといふ作業の名残である。雨がやめばすぐに乾くように、黒土などではなく、石ころだらけの畑だった。

(山崎 洋)



以来、一万人を超える卒

火ばら談義



日滝小 高藤澄人

山登りの喜び

鮎田 桂子

山登りを始めてはや八年になる。山登りといっても毎年夏休みに一回、仲間と前年に決めた山に登るだけだが毎年楽しみにしている。登る山は、県内の三千m前後の有名な山を狙っている。登山初心者が登るには難易度が高いのだが、どうせ登るならと恐いもの知らずの強みで次々と挑戦している。比較的人気の高い山は、登山道や山小屋などがよく整備されていて、高いわりには非常に登り易い。

そもそも山登りのきっかけとなったのは、前任校の校歌、「西はるかなる槍の穂や東にゆたけき菅平」にある。その槍の穂先に是非に登ってみたいと学年会で一致し、二年目に槍に登った。風雨の中の山歩き・ブロッケン現象・日没の大きな夕日・手の届きそうな星空・槍ヶ岳への二度の登頂・雲海と、素晴らしい体験をたくさんさせてもらった。そのために私は山のとりこになった。

山登りはつらいからと敬遠されがちだが、決してそればかりではない。とにかく気持ちが良いのである。また途中のつらさを軽減してくれるのが仲間存在である。先頭に立ちペースを作ってくれる人、一年振りの再会に近況を語り合い気を紛らわせてくれる人、山や花など足元から周囲の景色に目を向けさせてくれる人など、山登り自体を楽しんでいる。また現代の車社会の中、自分の歩いた分だけ進めるといふ常性で自分の成果を見定めることが出来る。そして私にとって、目標へ早く辿り着こうと焦る中であわてず一步一步着実に進む戒めを教えてくれるように思う。山に登ると仙人のように心が澄むと言われるが、自分の我が儘を許さない、自分を信じる故の心の状態の表れであろう。

山頂に立った時の充実感と清々しさは、まさに天下の屋根を見渡した様子で言葉に言い尽くせない。その爽快感ゆえにまた登りたくなるのだろう。私は、山登りができる幸福をこれからも味わっていきたくて思う。

(豊洲小)

理科学習帳に携わって

黒田 正浩

今年度から旭ヶ丘小学校に初めて理科専科としてお世話になりました。同時に信教の理科学習帳編集委員となりました。話には聞いていました、この委員の仕事は、文字通りですが、学習カードみたいなものを作ってあげたいのかと始める前は考えていましたが、それは私の大きな勘違いでした。

長野県は全国的にみても珍しく教育会が教科書を作成している。

委員を始め半年余りですが、簡単にこの委員の説明をしました。本部委員十名と県内各地の地方委員二十六名で構成されています。年六回、地方委員と教科書編集委員と一緒に集まり実践報告や改善すべき点を話し合います。本部委員は、四月下旬から毎週火・木の午後六時から信濃教育会に集まります。年六十回近くの会合になるのですが、今は

平成十四年度学習帳下巻について編集を行っています。学習帳が出来るまでには、構想審議から①初校②再校③念校④校了⑤見本をへて出版となります。また、写真の撮影(撮影できないものは購入)・朱書・グラビア・お話等も文やレイアウト等も検討していきます。今回は新学習指導要領となるため朱書の部分など実際のデータを得るため委員の先生方が実際に実験・観察を行います。

現在の理科学習帳の採用は七十%を超える位です。来年度から学習帳は、カラーページが増え、子どもたちや先生

方がさらに使いやすくなるよう編集を続けています。今回編集委員となることで、出版物にこれほど多くの時間や人の手が必要であることがわかり、また、教科書以外の教材研究を行ったり、教科書の奥深さなどを知ったりすることができました。教科・教材に対して自分として多少なりとも新たな一面を見出すことができたのではないかと思います。

県内の先生方の声で編集されている教科書(理科、生活科)・学習帳。御意見・御感想をお聞かせください。

(旭ヶ丘小)

思い出

青木 恵美

上高井で教員として働かせていただいた早四年。元気がいっぱいの子ども達に囲まれ、大きな声で怒ったり笑ったりしながら、充実した日々を過ごしています。私自身、須崎市で育ったということもあり、自分の頃はどうかたかなと振り返ることがよくあります。今は無き小学校の行事という事で、思い出を少し書いてみたいと思います。(どの位前かは、ご推測下さい。)

私が小学生の頃には、秋の運動会その他にも春の小運動会、四年生では海の見学、市内水泳記録会、陸上記録会、放課

後水泳などがありました。市内の記録会では、水泳・陸上共に強化練習があり、朝早くからリレーや種目の練習をしたり、放課後暗くなるまでプールで泳いだりしました。夏休み中も練習があり、中学校の部活なみだったなと思えます。打倒〇〇小学校!と小学校ながらライバル心をメラメラ燃やし、必死になって練習したことを思い出します。でも、いったん記録会が終わってしまつと、ライバル心も消え、他の学校の子と話をしたり遊んだり。他校の子と友達になれるいい機会でもあった

ように思います。放課後水泳では、希望者が大勢の日には、プールはイモ洗い状態でした。全員で大うずまきで泳ぎながら、前に泳いでいる平泳ぎの人に蹴られたり横の人とぶつかりながら泳いだことも楽しかった思い出の一つです。

今はもう無くなってしまった物ばかりで、ちょっと寂しい気もします。運動が大好きだった私にとっては、自分を出せる場であったり、夢中になってできたものだったので、本当にありがたかったと思います。

何をやってたかわからない、夢中になれるものがないという今の子にとっては、今は無きこのような行事も、頑張っ

て何かに取り組めるきっかけになるのかなと、最近ちがっと思ったりもしています。(豊丘小)

山々も白く着飾り、寒さも一層厳しくなってきました。二十一世紀の最初の年も、残りわずかです。

本号では「教育課程研究協議会」を中心に各種研究大会の成果などを編集させていただきました。

お忙しい中、原稿依頼を快くお引き受けくださり、貴重な原稿をお寄せくださった先生方、本当にありがとうございます。

学期末をむかえ、忙しくなりますが、お体に気をつけてお過ごし下さい。

編集後記